
僕の七千不思議

仲江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の七千不思議

【Nコード】

N8833A

【作者名】

仲江

【あらすじ】

僕の学校には、七不思議がある。それを、僕も一人の少女の仕業で体験する事になるなんて。この世には、人間が知らないだけで、不思議な事なんていくらでもあるんだ。

僕の学校には七不思議がある。

僕の偏見かもしれないけれど、そんなものがまだ存在している学校は、古い。霊が出やすいイメージがあるからね。

でもこの学校はもうすでに、古い校舎はほとんど残っていない。80%は新築された。

まあ、それも30年くらい前の話。つまり普通の校舎と変わらないって事さ。

しかし、この七不思議は今も生徒を通して固く紡がれている。

入学して例えば部活に入るだろう？そしてその部活の雰囲気や流儀を教えてもらう。

それと全く同じレベルに、この七不思議も受け継がれてゆくってわけさ。

その理由として一つ僕が言える事は、実現したから。

実に簡素な理由だろう？でも十分じゃあないか。

七不思議の存在が認められ、同時に存在の意味を否応なく人に突き付ける事が出来るんだから。

でも実際に体験した人達は30年前にこの学校にいた人達。もうおじさん、おばさんだね。僕等の親くらいの世代。

まあ、僕の両親は体験してないんだけど。

新築され始めた時代だから、崇られたんだって家のじいちゃんと言ってる。じいちゃんも、もちろんこの学校の卒業生。

でも僕は反対。そんなもの関係なしに起こったと思う。だって、新築されちゃったしね。祟りならもつと何か起こっただろうし。

疑ってる？まあ、無理ないよ。七不思議なんてさ。

でも皆、実体験の話を聞くとそんな事言えなくなる。

同じ事を言うんだ。皆、皆さ。口裏合わせたように。

出来る？こんな事。皆で口裏合わせようぜ、オー、なんてさ。無

理だ。

僕等の町は小さな町でさ。島なんだけどね。中学校はここしかない。だから、全員、この学校。まあ、義務教育だしね。高校は島の外に行く人もいるけどさ。

小さな町だけど、全員ここに集めるとやっぱ結構な人数だよ？
1500人は最低。

こいつら全員動かせられる人望、君にある？

で、本題はここからかな。実体験話、聞きたいでしょう？
僕の学校には七不思議がある。

その一つ目、“神隠し”。

30年前、その時の校長が神隠しにあった。

全校生徒の前で、長ったらしい話をしている時。皆が同じ事を言うのは、このせい。

「以上、終わります。」

その言葉に生徒がほっとして顔をあげた。全員が校長を見る。

その瞬間を狙ったとしか思えない。だって、見なかった人がいないのは、逆に不可思議だから。

校長が、いない。

そう、いないんだ。

風が巻いて連れ去ったわけでも、雷が落ちて1000ボルトの光で目の眩んだその瞬間でもない。

あまりにも自然に、す、と消えて、皆、一瞬、頭が働かなかった。
「消えた……。」

誰かが呟く。消えた、消えた。だんだんざわめきが広がってゆく。
全校生徒と先生で捜し、最後には町中が彼を求めたけれど、結局、見つからなかった。

以上。そして、もう一つ。これはごく一部の人が体験していて、神隠しよりかは不確か。

僕の学校には七不思議がある。

二つ目は、“血の滴る屋上”。

今だに改築されていない、20%の校舎。

きつとこれがこの町で一番高い所。学校自体が山の上だしね。でも、屋上への扉がない。なんでも、設計ミスしたらしい。開かずの扉、というわけだ。

何故こだけ新築されていないかは、少なくともこの話が関係していると思う。

神隠しから半年くらい過ぎた、ある日。校舎の下で掃除をしていた係員の人の頭に、ぽつん、と何かが落ちた。

何だ、と思つて指ですくつて見ると、赤い液体。

彼は上を見て、校舎に滴っているそれを見た。

もちろん七不思議を知っているけど、雇われてばかりの彼は、例の神隠しを見てはいない。実体験を聞いても信じなかった。

そんな彼は悪ガキが絵の具をぶちまけた、と思つて、怒鳴つた。驚いた生徒達は窓から彼を見る。

「きやあ。何これ、血？」

「お前達が、絵の具をぶちまけたんだろう。」

「ぶちまけてないですよ。だって、これ、この教室より上から流れているじゃないですか。」

その教室より上は、屋上しかなかった。

はしごで上つて、絵の具を垂らしたんだ。つて言う人もいた。

でも、学校には屋上に辿り着けるくらい長いはしごはない。

まあ、まず隣の二階校舎にはしごを架けて屋上に上つて、更にそこからなら届かなくもないだろうけど。目立つよね、かなり。

学校の外からはしごを持って来たにしたつて、外に出す時は？誰にも目撃されない確率は低い。

赤い跡は今でも残っている。

どう？あとは、王道の“トイレの花子さん”。

“唄う校舎”。これは、その名の通り、校舎が奇妙に唄いだす。

“近付けない人影”。これは、前を歩いている人影に、走っているのに近付けない。とかね。

この二つ、まあ、大部分は神隠しだけど。そのせいで、殆どの人が七不思議を信じている。

僕？僕は、信じているといえば信じているし、信じていないといえ信じていない。

だって、人を沢山の人の前で隠せるのは、マジシャンだって出来るし、校長自身が自作自演したんなら、その成功率は高くなる。

例えば、素早く、校長台の下に隠れる。皆の気が動転している間に、そこで変装（学生服がベスト。でもいい年したおじさんが、とは考えたくないね。）して、出来たらあらかじめステージの床に扉を付けておく。暫くはそこに隠れて、騒ぎに乗じて上手く学校の外、そして島の外へ。

ほら、説明できるだろう？

屋上の事だって。

別に、はしごなんか使う必要はない。そうだろう？

だって、わざわざ上に行かなくたって、行くのは絵の具だけで良いんだ。

ロープを使ったりいくらでも。それか、簡単な時限装置のトリックを使ったか。

僕以外にも、説明出来る人はいくらでもいるだろうね。

でも、いくら口で説明出来ても、信じている人達には無意味だ。本当に七不思議じゃないって証拠もないんだから。

でも、僕は信じていないわけじゃないんだ。むしろ、興味は人一倍。

だって、世の中、人間が知らないだけで、不思議な事なんていくらあっても不思議じゃない。

例えば、未確認生物だって。人間が知らないだけで、いないとは限らない。

そういう事。

「聡くん。」

僕が旧校舎の跡を眺めていたら、彼女に話しかけられた。

「やあ、椎名。」

彼女の名前は松丘椎名。僕の幼なじみ。

お互い兄弟がいない僕等は、兄妹のように育った。

長い髪をさらさらさせてやって来た彼女は、前髪を綺麗に揃えて、垂れ目でいつもゆっくり喋る。

小学校の頃は良く虐められていたくせに、茹卵を剥いたような肌のせいか、中学に上がってからじわじわとモテだした。

「何をしているの？」

熱心に跡を観察している僕に、垂れ目をクリクリと動かして尋ねてきた。

「これは、本当に絵の具なのかな、と思ってね。」

「血だったら、素敵だね。」

椎名は満面の笑みで、瞳を輝かせながら言った。

椎名は他の女みたいにキヤーキヤー言わない。それが、最大の魅力。

「30年前に流れて来たのは、あの窓の横の、これ。でもね、私、他にも数本見付けたの。」

「そりゃあ、これだけ語り継がれる七不思議だ。30年前以上にあるわけだから、過去にも体験されているんだよ。」

「でも、校長神隠し以上も前の体験話、聞いた事がないよ。」

「僕のじいちゃんが体験しているよ。あんな大胆な事がないだけでさ。個別にはたくさんあるんじゃない？」

「そっか。」

二人で話していると、チャイムが鳴った。今日はあとHRだけで終了だ。

僕が教室に行こうと歩き出したら、椎名が止めた。

「聡くん、あのね、相談にのってほしいの。」

椎名の眉間に寄り、下がった眉を見て、僕はまた家庭の事か、と思った。

「じゃあ、放課後に教室へおいで。」

ありがとう。

そう微笑んで、椎名はパタパタと走って行った。
そして放課後、僕等は無言で、二人だけ隔離した空間を意識的に
つくり、誰もいなくなるのを待った。

「……死にたいの。」

顔をオレンジ色に染めて、椎名はポツリと雨漏りのように呟いた。
「どうした？」

「分からない。ただ、部活も、クラスも、家も、私を静かに拒絶す
るの。」

「僕も椎名を拒絶しているの？」

椎名はゆっくりと首を降った。いや、横に流した。それほどゆっく
りな動き。

「だろっ。なら、死ぬなんて言うな。愚痴なら聞くからさ。ほら、
ぶちまける。」

「……ありがとう。」

椎名は力なく微笑んで、話し始めた。

「皆、私が死にたいと思っっている事に気が付かないのかな。」

こういう時でも笑うのは、椎名の悪い癖だ。

「ああ、少しスッキリしたかも。」

細かに不満や今の状況を話し終えた椎名は、そう言った。

でも、顔はスッキリしていないぜ？

「じゃあ、帰るね。」

椎名はお気に入りの、黒猫のキーホルダーが付いた鞆を肩にかけた。

「送る。」

「大丈夫。変な噂、たてられちゃう。」

「今更。」

二人は笑った。

「でも本当、大丈夫。一人でゆっくり帰りたい気分。」

「分かった。」

そっという事で、椎名を先に帰らせた。

でも、家は隣なんだから、足の遅い椎名にはどうしても追い付いてしまう。

僕は寄り道をして帰った。

でも、もしかしたらそんな必要はなかったのかもしれない。

次の日、椎名はいなくなった。

「あれ、椎名は？」

昨日の事もあり、僕は気になって隣のクラスまで椎名の様子を見に行った。

「休み。」

昨日の今日で休むなんて、心配するじゃないか。

本当は今すぐ家まで押しかけたいが、まあ、せめて、携帯電話でメールを送っておいた。

大丈夫？

しかし、返事は帰ってこない。

その、直後の事。

きゃあーっ！

女性の悲鳴が聞こえてきた。あれは一人じゃないな。あの、旧校舎からだ。

皆がザワザワしだして、そこへ向かう。

僕も興味本位で駆け付けると、もうすでに人でいっぱいだ。

「どうしたの？」

その子等の友達らしい子が尋ねると、力なくこう応えた。

校舎が、唄った。

「聞き間違じゃないの？音楽の授業だったとか。」

「違うじゃないよ！だって、この上から聞こえてきたの。女の人の声。」
体験者が校舎の屋上を指す。

唄う校舎。

この話の由来は、昔、神隠しにあった子供の母親の唄声。子供が悲しまないようにこの校舎から毎夜、天を仰いで唄ったという。そしてその母親はついに寿命まで唄い続けた。

僕のコメント。

七不思議にあって、夜を受けた母親は、ついには自身まで授け、最愛の子供を奪った七不思議の一部となってしまう。こんなにゾクゾクする物語り、他にはないよ。

ザワザワ野次馬が騒いでいる。

中には校舎に耳をくつつけて、自分も体験者になろうと欲張っている人もいた。

僕がそれより気になったのは、唄わない携帯電話。

七不思議は椎名と話すから面白いのにさ。

お見舞いしようと、椎名の家の前でリンゴを持っていたところ、

椎名のお母さんが飛び出してきた。

「どうかしました？」

「聡くん……！椎名知らない？」

「え？」

椎名が、なんだって？

「昨日の学校から帰って来ないの。」

おばさんは涙で頬を濡らし、目尻の皺に伝わらせて言った。きっと、何度も同じところをグルグルと搜したのだろう。

「なんで僕にもっと早く言わないんですか！」

僕は走り出した。きっと、おばさんも搜しただろう所だけど、もしかしたら、なんて浅はかな望みをかけて、がむしゃらに走った。いない。

だめだね、こういうときにこそ冷静に、だね。

とりあえず、椎名家に帰って、おばさんに警察へ電話してもらおう。

あれ？でも警察は、いなくなって何日から搜索してくれるんだっけ。だめだ、頭が働かない。

……いつ、いなくなった？

僕に相談して、学校から帰って来なかったって言っていたな。つまり、通学路の途中。

こんな事になるなら、無理矢理にでも送れば良かった。そしたらこんな事にはならなかったかもしれないのに。

自分の不甲斐なさに腹を立てて、公園の砂場を蹴った。

カコン、と意外な音が転がったから、見てみたら、おもちゃのスコップを一緒に蹴っていた。

きっと暗くなる前まで遊んでいた子供が忘れていったんだね。その子は今頃泣いているかも。

「……。」

送っていれば、こんな事には、本当にならなかっただろうか。

僕は少し冷静になって、ある一つの可能性に気が付いた。

神隠しにあっていたら？

子供のように、校長のように。

そのとき僕が隣にいても、絶対に無力だよ。

だって、すと消えるんだよ。人間の僕には何も出来ない。

そう考えると、どうしようもない事だと思えた。

とりあえず、おばさんが待っている。帰ろう。

その前に、僕はスコップを草むらに隠した。

僕隠し。

これくらい良いでしょう？神様。

もしかしたら家に連絡があるかもしれないという事で、待ってもらっていた。

フラフラ帰ると、どうだった？とおばさんが憂いを帯びた目で迫って来たから、首を振るのが痛かった。

「椎名の携帯電話に、かけてくれた？」

「はい。朝、メールですけど。返事は来ません。」

「そう、あの子、私達の番号は着信拒否しているものだから。」

おばさんは暗い気分で重くなった体を、ドスリと椅子に落とした。

「もう、警察に知らせたほうが良いわよね。」

「はい、そうして下さい。……おじさんは？」

「そのうち帰ってくるだろう、って仕事に行ったわ。」

おじさんらしい冷酷さに、舌打ちをした。おばさんはその辺、諦めたのか、溜息もつかずに110を押す。

全く、腹が立つよね。娘がいなくなっただよ？なんて、無情。こんなだから、椎名が死にたいなんて言い出すんだ。死にたいの……。

椎名の声を思い出して、ゾク、とした。

馬鹿げた考えを掻き消すように頭を振る。本当、馬鹿だな、僕。

「おばさん、もう一回捜してきます。疲れているでしょう？休んでいて。」

ありがとうね。

そう、眉を下げて微笑んだおばさんは、椎名に似ている。作り笑顔。一瞬で分かるさ。

走りながらも、もう無駄なんじゃないか、なんて考える。

でも、もしかしたら帰りたくても帰れずに、今頃一人で泣いているかもしれないよ。あの、子供が神隠しされた母親のように。

そこで僕はハッ、とした。そうだ、学校も捜してみよう。

僕は暑くなったブレザーを脱いで、暗い学校へ急いだ。

校舎は、空の闇に透けている。

今頃、一人で迎えた二度目の暗闇に、きっと孤独を感じている。

荒い息に言葉を乗せて、ひたすら椎名をよぶ。

椎名、椎名……。

どこ？残るは旧校舎らへん。

校舎の裏に回った。そこには、はしご。何でこんな所に？まあ、こんな事にかまっていられない。

僕は広く柔らかい砂漠に、前歯を落としたかのように椎名を捜した。

いない、いない。何で。

もしかしたら僕は、前歯ではなくて、砂漠に零した水を汲みなおそうとしているのかもしれない。

「椎名……。」

校舎に両手を付いて途方に暮れていると、すー、と何かが滴つてきた。

暗闇でそれは黒く見える、鉄臭いもの。

こんなときに体験したって、何にも嬉しくなんかないよ。

僕は無視して、駄目もとで椎名に電話をかけた。下校中にいなくなっただから、携帯電話は持っているはずだ。充電がなくなっていなければ良い。

電話をかけた、その時、校舎が、唄った。

ほどよく高い、寂しい音色。

多分、今日女生徒が聞いたものより、はつきりと、でも微かに静かな闇に響いている。

嘘だ。この闇には絶対的に果てなんてないのに、何で反響するの。嘘だ。僕は信じない。椎名の好きな、女性歌手の唄なんかじゃない。

子守唄みたいに、聞くと良く眠れるの。

そう言っていた。

その声とほぼ同時だった。着信の唄に耳を傾けて目をつぶり、睫毛の影がツルツルの頬の上を滑る。口元は幸せそうに、綺麗な弧を描く。そんな椎名を思い出したのは。

それに続いて、地面まで染み込んだ赤を見たら、死にたいの……。

また、椎名の声が蘇る。

椎名、このはしごを使ったの？

僕は急いではしごを掴み、旧校舎の隣校舎へ架けた。屋上に上がると、そこからさらに旧校舎の屋上へ架けて、僕は空に近くなった。ほんの、ほんの少しだけ。

上つてすぐ、僕の足元には、なにやら黒い物体が横たわっていた。大きさからすれば、成人男性の……死体。

しかも死後から大分経過しているかな。彼の周りには干からびた血が広がっていて、骨以外、自然に還りそうだ。

もしかして、彼は……。

嘘だ。いる筈がない。だって、ヘリコプターまで使って捜したんだ。この死体が、その後ここに移動したの？

そして、少し離れた所に鞆が放置してあった。見覚えのある、黒猫のキーホルダー。

中を漁らせてもらうと、携帯電話が電池一本で埋もれていた。

僕が送ったメール。

9時57分。あの、女生徒が悲鳴をあげた時間。

……椎名。

椎名、椎名、椎名、

「椎名。」

さらさらな髪、制服のまま、屋上の端っこに彼女は僕に背を向けて横たわっている。そこは調度、さっき血が流れてきた真上。

急いで駆け寄る。ついさっき流れたばかりなら、助かるかもしれない。いや、あれは椎名の血じゃない。

はしごを使って、ここまで来て、僕の呼ぶ声が聞こえたのを見計って、絵の具を垂らした。

それで今から近づく僕に振り返って、騙された、と垂れ目をさらに垂らして笑う。

振り返って。さあ、今から近づくよ。一步、踏み込む。振り返って。もう一步、一步、一步。振り返って、振り返って、振り返って。早く！ねえ、その冗談、つまらないよ。思いきり驚いてあげるから。ねえ、作り笑顔で良いから。その後すぐに泣いても良いから。僕の靴の先から、ピチャ、と音がした。ゆっくり、椎名の言動よりゆっくり、しゃがみ込む。

だらりと力ない椎名の体を持ち上げる。すると、首あたり、ヌルリと何かで指が滑った。

気付いていたよ。この異様な鉄臭さに。

近くには血に埋もれた彫刻刀。まだ幼い手で書かれた“しいな”の文字。これ、僕が書いてあげたんだよ。覚えている？

胸が、旧校舎の下敷きになったみたいだ。

それを和らげようと目をつぶると、僕の頬に沿ったものが落ちて、次は椎名の頬に沿った。それに洗われて、一筋分だけ、流れ落ちる血。

「どうして……椎名……。」

どうして、こんな事……。

カサ。

僕等が身につけている物の中では、ありえない音が鳴った。

椎名の、セーラーの襟らへん。

それは、襟の裏に縫い付けてあった。僕は血が付かないように、ズボンにを拭ってから取った。

椎名の、可愛いメモ用紙。椎名の字。

高宮聡くんへ。

きつと、私を見つけてくれる人がいるなら、聡くんだと信じていた。私を、ありがとう。

これを一番に読んでいるのは、聡くんだよ。

聡くん、悲しまないで。

私は、幸せになるの。

果てのない、無に還るの。

松丘椎名より。

椎名……。そこまでして死にたかったの？

七不思議にそってまで。それは椎名のため？僕のため？

そこまでなら、僕が殺してあげたのに。

神様。どうして、椎名の生きていけない世界を造ったのさ。どうして、そこに椎名を堕としたのさ。どうして、僕と椎名を隣同士にしたのさ。どうして、僕と椎名を会わせたのさ。どうして、椎名を最初から、椎名の望む所へ行かせなかったのさ。どうして、僕から椎名を奪うの？

僕は天を仰いで椎名の好きな唄を唄った。

そんな事をしたって、僕の七千不思議は解けやしないのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8833a/>

僕の七千不思議

2010年10月31日04時48分発行